

令和 2 年度

国 語

13 : 30 ~ 15 : 10

文学部国文学科
一般入学試験

注 意 事 項

1. 合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. 問題は 1 ~ 11 ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、よごれの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された解答欄に記入しなさい。
5. この冊子は持ち帰ってさしつかえありません。

訂正①

6項5・6行目

(誤)空むなし

世よ

(正)空むなしき

世よ

訂正②

7頁設問一

(誤) 次の㉞〜㉟において、

(正) 傍線部㉞〜㉟について、

訂正③

8頁(古文) 本文4行目

(誤) 次の日もいとも許されず、

(正) 次の日もいとま許されず、

問題は次のページ
から始まります。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

閑かきや岩にしみ入る蟬の声

静かだ。蟬が鳴いて、その声が岩に浸み込んでいる。表面的にみれば、この句が伝える情報は、ただそれだけのことである。かりに誰かがこう呟いたとしても、そのことはがさほど強い印象を残すことはないだろう。だがこの句はこれまで実に多くの読み手に深い感銘を与え、またその意義についても実に多くのことが語られてきた。その差はどこから来るかといえは、言うまでもなく、それは個々の語の選びかたとその並べかた、文法的なまとめかたの違いのみである(ここではジャンルや形式、それにリズムの問題はひとまず措く^⑦)。例えばあとで触れるように、これは一篇の「俳句」だと知るだけで、その発言に対するわれわれの態度、注意深さの度合は、たんなる呟きを聞く場合とはがらりと変わる)。では他ならぬこれらの語の連なりから、われわれはどのような手順で、何を読み取るのだろうか。

「閑かきや岩にしみ入る蟬の声」。こう読み下したとき、まずどこを面白いと感じるか、どの個所に強い興味を覚えるかが問題になる。別な言い方をすれば、ことば続きのどこが気になり、どの個所に引つかかるかということであって、そうしたXが少しもなければ、われわれはただ文字通りの意味を読み取ること満足し、それ以上の努力を払う必要を少しも感じないことだろう。読み手を句の領分内に引き込んで、その先にまだ何かがあることを教えるのは、表面的な字句の連なりにみられる意外性なのである。

この句の場合、そのような引つかかりは二つある。ひとつは「蟬の声」が「岩にしみ入る」という点、もうひとつは、そうして蟬の鳴いているのを「閑か^{しづか}」だと称している点である。もっともよく見れば、蟬の声そのものが「閑か」だと言っているわけではなく(例えば「閑かなり岩にしみ入る蟬の声」といった風に)、切字の「や」を介した上で、そうした状況の全体に「閑かき」という観念を対置しているのであるが、その「や」による静けさの誇張という点を除けば、結果はほぼ同じことである。液体でもない虫の声が

固い岩に浸み込むといい、またうるさい蟬の声が静かだという。これはどう見ても矛盾であって、そのままなるほどと納得して読み過ごすわけにはいかない。

A それら二つの矛盾のうち、さきに直接われわれの注意を引くのは前者である。なぜならこちらの方は、「岩にしみ入る蟬の声」という、じかに隣接するひと続きの語句のなかに現われるのに対し、後者はもつと間接的に、それらの語句全体と「閑かさや」との関係のなかに改めて生じる矛盾だからである。ここではそうした直接の引つかかりを含む一連の語句のまとまりを「基底部」、その基底部との関係に矛盾なり重複なり、何かの緊張をはらむ部分を「干渉部」と呼んでいる。そこで読み手はまず、「しみ入る」という表現をどう受け取るべきかという点から手をつけることになる。

いま見たように、「岩にしみ入る蟬の声」という連なりは、明らかな矛盾を含んでいる。「浸む」はむろん、「気体や液体が物の内部までいつのまにか深く入りこんでとれなくなる意」(『岩波古語辞典』)である。「気体」というのは、例えば「香に染む」のように、匂いのしみつく場合を指している。声も気体のなかを伝わるが、「浸む」ものの部類には入らない。だからこの表現が気になるのである。こうして詩の表現がふだんの語法からイツダツしたり、あるいは現実にはあり得ないような事態を告げるとき、読み手は納得の行く解釈を求めて、さまざまなやり方でその表現を「合理化」しようとする。例えば何かの譬えとみたり、ただの幻想と受け取ったりするのである。「しみ入る」が一応、液体専用の語だとすると、ここでは蟬の声が液体にたとえられていることになる。そして蟬の声を液体に見立てることは、実は珍しいことではなく、「蟬時雨」という季語や、「降る雨のような蟬の声」^①という言い回しにもあるように、この譬えは日本語の伝統のなかに深い根を下ろしている。そうしてみると、「蟬時雨」^②という定石的な表現を仲介として、蟬の声が「しみ入る」こともあり得るわけである。

それでは次に、「岩」に浸み入る点についてはどうだろうか。岩という固い障害に突き当たって、ここでひとつの対立が明らかになる。つまり「しみ入る」対象として、岩こそはもつとも手ごわい相手なのである。いわば柔軟そのものの液体としての「声」と、「固い岩」。詩のなかで、ことに俳句のような短詩のなかで、そうしたメイリヨウな対立に出会った場合、読み手はふたたび背後の意味を求めて、その対立を極端化しようとする。例えば黒と白、天と地、生と死、善と悪などのように、対極化によって

その一対を、ある普遍的な意味をになう典型どうしの模範的な対立の表われとして捉えようとするのである。こうして岩はあくまで固く、液体はあくまで柔軟なものと感じとられることになる。ここでもことばに刻まれた伝統が、その作業を助ける。「男児の一念岩をもうがつ」、あるいは「思う念力岩をも通す」といった諺があるように、またしばしば通俗的な教養書のなかで、長い年月をかけて岩に浸み入った雨水が、遂にその岩を真っ二つに断ち割るに至った事実が驚きをこめて語られるように、岩はもつとも浸透しがたい固さを代表する物なのである。

そしてこの容易に浸透を許さないという岩の性質から、「しみ入る」という表現に含まれる誇張が明らかになる。蟬の声は液体のように柔軟でありながら、それほど固い岩にさえ浸み通るといふ。そして蟬の声のもつ力に関するこのめざましい誇張は当然、そうした固さをもたず、無抵抗にその声の浸み入るにまかせている存在、つまり人間としての語り手をわれわれに思い起こさせる。語り手は鳴き声に聞き入りながら、その圧倒的な浸透力を身に覚えて、この声は周囲の草木やわが身はおろか、岩をさえ通さずにはいないと感じているのである。つまり「岩に浸み入る」は、結局のところ、「身にしみ」、「心にしむ」の誇張だったのであって、もともと「浸む」の語には文字どおりの意味の他に、「転じて、そのように心にふかく刻み込まれる意」(『岩波古語辞典』)がある。

歌語としての「身に入む」は、もともと「染みるほど、あるいは濡れとおるほど、身に深く感じる」という意味で、「もののあはれ」が秋の情趣にしばられるにつれて、季節が秋に固定しはじめ、ことに「秋風」に結びつくことが多くなった。その勢いを決定づけたのが、例の俊成の「夕されば野べの秋風身にしみて」の歌である。そして「身に入む」はのちに連歌・俳諧の季語となり、より即物的に秋の冷気を言うようになった(『基本季語五〇〇選』)。そのように語り手は、しみ、みと、骨身にしみるように蟬の声を感じ取っているのである。しかも、そうして「秋風」が「身に入む」という常套句がよく耳に馴染んでいるために、そこからのルイスイで、蟬の声が「しみ入る」という矛盾をはらんだ表現が、いよいよ受け入れやすいものとなる。

何かの心が心にしみる、その印象深さを暗示するために、対照的に固い岩を引き合いに出すという行き方をとった芭蕉の句例が、もうひとつある。

鳩の声身に入みわたる岩戸哉

「岩戸」は岩屋の戸、岩の門の意で、大きな岩窟の入口で鳩の声を聞いていると、秋の冷気とともに、その声が「身に入みわたる」という。ここでは浸み入る対象が「岩」ではなく、はっきり「身」と明言されている。つまり「岩にさえ」という誇張のまわり道がなく、感慨の深さがはっきり直言される一方、「岩」は、ひとつにはかほそい鳩の声との、またひとつにはもろいわが「身」との対照によって、その声の浸透力を暗示する側にまわったのである。そして次の二句も、そっくり同じ硬軟の対照を興味の軸としている（「撞鐘」は釣鐘）。

蟬なくやわが家も石になるやうに

一茶

撞鐘もひびくやうなり蟬の声

芭蕉

「閑かさや」の句の岩について、その種類が問題にされたことがある。大谷石（わおや）のような柔らかい岩、つまり凝灰岩のたぐいではないと、どうしても「しみ入る」という感じが出ないという。事実、この句の詠まれた（といつても）のちに何度も句形が変わっているのだが、立石寺（たていしや）の岩は、まさにうってつけの種類であるらしい。だが俳句のような短詩のなかで、ことばがどのように働くかを思えば、そうした註（しゆ）索（さく）があまり参考にならないことは、言うまでもない。

ところでこのように深く語り手の心にしみたものは、一体何だったのだろうか。むろん、直接には蟬の声そのものである。だが何かが「身に入みる」という場合、それは決してたんなる感覚の対象にとどまらず、そこから触発されたある種の感情——「もののあはれ」に類する情感をいうのがつねである。基底部の範囲内では、その点についてたしかかな手がかりが与えられていない。

ひとつの可能性としてすぐに連想されるのは、はかない命をも知らず、そのように盛んに鳴く蟬に対する哀れみの情、ひいてはこの世の無常一般に対する感慨だろう。蟬は数年から十数年を地中に過ごし、成虫としての生命はわずか一週間ほどだという。その短命な蟬への共感、和歌以来の「蟬」の本意のひとつであつて、「常もなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ」(後撰集・夏・一九三・読人しらず)、「空蟬うつまみの殻からは木ごとこに留とどむれど魂たまのゆくへを見ぬぞ悲しき」(古今集・物名・四四八・読人しらず)、「空蟬」は蟬の抜け殻などの歌がある。連歌の方では、例えば『連珠合璧集』に「空蟬トアラバ、(…)葉はにをく露つゆ 空むな甲斐がひに我はただ」などがある。だがこれはむろん、まだ句のことは自体による指示を得る前の先回り、たんなる当て推量にすぎず、そうした一句全体の意義を考えるには、干渉部の「干渉」をまたねばならない。

⑨ 「閑かさや」という干渉部は、見たところ、そうした基底部からの漠然たる予想を大きく裏切るものである。あるいはその種のヨダンヨダンをいっさい抜きにしても、この干渉部が一見、基底部とのあいだにはなほだしい食い違いを生じるようにみえる点に変わりはない。蟬は「いかにもやかましい虫」(『図説俳句大歳時記 夏』)の典型であり、まただからこそ、その短命がひとしお哀れなのである。そのうるさい蟬の声を浴びるほど聞きながら、静かだという。この矛盾の生む意外性は、基底部のそれを上回るものだろう。そして、ここでふたたび例の対極化への傾向が、読み手を促すことになる。このようにあからさまな、そして思いがけない「騒」と「閑」の対立を前にして、読み手は蟬の声をいよいよ騒さわがしく、また静けさの感覚もますますその度合を強めて思い描こうと努めるのである。

その上いまでもなく、この干渉部はたんにそうして両者の対立をきわ立たせているだけではなく、あえて常識に逆らつて、その両者の一致を主張しているらしい。つまり「騒」の極致に「閑」を見出し、騒音をかえつて閑寂の契機として捉えるような、一種特異な境地を語っているのである。しかも語り手はただそのように断言するだけで、その間の感覚的、心理的な事情については何の説明も加えていない。だがそれでいて、そのように矛盾した、不条理な発言を、読み手が意外に素直に、ごく自然な実感

とともに受け入れることができるのは、そうしたトウトツな表現のしかたと、それを引き出した特殊な発想そのものが、われわれの文化の伝統のなかに根をもっているからである。

(川本皓嗣『日本詩歌の伝統——七と五の詩学』による)

問一 次の㉠㉡㉢において、漢字に読みがなをつけ、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 次の熟語のうち、空欄 に入る最も適切なことばを書きなさい。

不満 抵抗 挫折 転倒 努力

問三 傍線部A「それら二つの矛盾のうち、さきに直接われわれの注意を引くのは前者である」とあるが、「前者」の「矛盾」は、「閑かさや」の句のどのような点に現れているか。五十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部B「人間としての語り手をわれわれに思い起こさせる」とあるが、どういうことか。七十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部C「句のことば自体による指示を得る前の先回り」とあるが、どういうことか。七十字以内で説明しなさい。

問六 波線部「と」のところでこのように深く語り手の心にしみたものは、一体何だったのだろうか」とあるが、著者はこの句を最終的にどのように捉えているか。八十字以内で説明しなさい。

著作権許諾が得られていないため非公表

(小学館『新編日本古典文学全集(40) 松浦宮物語・無名草子』による)

(注) ありし教へ——老翁が氏忠に与えた、「華陽公主から琴の音を伝え受けた後は、唐の国でその音を響かせてはいけない」という教訓。

問一 傍線部(1)「ながめられて」、(2)「え掻きならさず」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部ア「出できぬべきかな」、イ「なびき従ひきこえぬ人なし」から助動詞をすべて抜き出し、それぞれについて、終止形、意味、ここでの活用形を、(例)にならって記しなさい。なお、意味は、次の()内の語群から選んで書きなさい。

〔仮定 推量 過去推量 命令 勧誘 可能 打ち消し 完了 過去 強意 願望 詠嘆〕

(例) 「のたまひつれど」

抜き出し	終止形	意味	活用形
つれ	つ	完了	已然形

問三 二重傍線部「いとど露けき夜の雨かな」は、どのような様子を表しているか、説明しなさい。

問四 A「忘れじと伝へし琴の音に立てて恋ひだにみばや秋の長き夜」の和歌は、誰のどのような心情を表しているか、説明しなさい。

問五 波線部「世になくもてかしづきたまふ」は、誰のどのような様子を表しているか、説明しなさい。

(三)

次の漢文を読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上送り仮名を省略した箇所があります。

魯^(注1)穆公問^(注2)於^(注2)子思^(注2)曰、吾聞^(注2)龐糲^(注2)氏之子不^(注2)孝、其行何如^(注2)。子思^(注2)對^(注2)

曰、君^(注2)子尊^(注2)賢^(注2)以崇^(注2)德、舉^(注2)善^(注2)以觀^(注2)民。若^(注2)夫過^(注2)行、是細^(注3)人之所^(注2)識^(注2)

也、臣^(注2)不^(注2)知也。子思^(注2)出^(注2)。子服厲^(注2)伯入^(注2)見^(注2)。問^(注2)龐糲^(注2)氏子。子服厲^(注2)伯

對^(注2)曰、其過^(注2)三、皆^(注2)君之所未^(注2)嘗聞^(注2)。自^(注2)是之後、君貴^(注2)子思^(注2)而賤^(注2)子

服厲^(注2)伯也。

(『韓非子』による)

(注) 1 魯穆公——魯国の君主。魯は孔子の出身地。

2 子思——孔子の孫。徳の高い人物として慕われていた。

3 細人——小人。

4 子服厲伯——魯国の臣下。

問一 傍線部A・Bのよみを平仮名で答えなさい。送り仮名のつく語はつけて答えなさい。

問二 傍線部C「臣」は誰か。本文中から抜き出して答えなさい。

問三 傍線部①は「君の未だ嘗て聞かざる所なり」と読みます。この読み方にしたがって、解答欄の白文に返り点を付けなさい。
(送り仮名不要)

問四 穆公はなぜ子思をたつとぶようになったのか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。